

## 長崎原爆被災者を収容した、二つの海軍病院

国病久原会 名誉会長 廣田典祥

私がある日、「大村海軍病院」の話を、地元の、ある郷土史家の人に話してみました。ところが、「それは知りませんでしたね」と言われて、我ながらびっくり。その人が知らないようであれば、もう大村市民の殆んどは、おそらく「大村海軍病院」のことを知らないのではないのでしょうか。長崎医療センター職員の皆さんに尋ねても、当院の前身が、実は大村海軍病院だったと少々知っている方はごく稀で、大部分は全くご存知のないのではないのでしょうか。それもその筈です。もう80年も前のことですから。

原爆投下の悲惨な歴史のことは皆様、よく御存知かと思えます。「大村海軍病院」がその時に果たした、被災者への救護、医療は歴史的に見ても看過できない出来事だと思います。

私たちは意識することなく、現在の医療に従事していますが、よく考えてみると、この現在は、過去の連続の流れを受け継いできているのです。現在は既に過去となってしまいます。複雑な諸要素がからみ合っている現代でも、過去を見る新しい眼が切実に求められているのです。先輩たちは、予想もできない、とてつもない歴史的出来事に遭遇し、その苦難の中、英知を絞り、未来への希望を掴もうと奮迅の努力を傾注してこられました。そうした姿を「大村海軍病院」という過去の教訓で知ることができる筈です。

その大村海軍病院だった遺構は当院には全くと言って良いほど残っていません。僅かに、現、長崎医療センターの正門近くの長与専齋の生家、松香館の前庭に、当時の海軍病院の門柱が残っているのみです。その傍に、大村海軍病院に勤めていたOB会「大村海軍病院会」から寄贈された大村海軍病院顕彰碑(一瀬春駒書)が残っています。

その碑文を紹介してみましょう。

この宏大なる久原台地に大村海軍病院が開設されたるは昭和17年10月1日、時あたかも戦時非常の際にして後送せらる、多くの戦傷病将兵の収容治療に当り、特に長崎市に原爆落下の際は、総力を挙げて被災者の救護活動に任じ、徹宵連日に亘り、その数七百余名に達せり。その惨たるや名状し難し。開院後、僅か三年にして終戦を迎へ全施設厚生省に移管国立大村病院となり、次いで国立長崎中央病院と拡充改称され現在に至る。爾来三十六年、当時の面影はその片鱗を留めず、僅かに植樹の茂るを見るのみとなれり、茲に大村海軍病院会結成を機に当時の在籍者有志相語り思い出の地にこの碑を建立して漸く忘れ去られんとする本院の果たせし使

命を顕彰し、併せて療養中不帰の人となりあるいは本院より前線へ転出して散華されし、幾多の将兵諸子並びに公務遂行中も不幸にして殉職された日赤救護班員の英霊加へて、多くの原爆犠牲者の尊い魂を慰むる鎮魂の碑として永く後世に伝へんと願うものである。

昭和五十六年五月二十四日 発起人一同。

ここに、大村海軍病院の歴史が凝縮して表現されています。では、当院の歴史は石の碑文としてしか、残っていないのでしょうか。当時の面影は、その片鱗も残っていませんし、何かその幻影を見ているような気がします。だが、この碑文にこめられた鎮魂の祈りに共鳴することを忘れてはならないと思います。歴史が残した教訓をしっかりと身につけて生きることが大切ではないでしょうか。

ところが、当時の大村海軍病院院長泰山弘道（やすやまこうどう、軍医少将）が当時のことを詳しく書き残しています。大変貴重な、当院の歴史的記録（泰山弘道：長崎原爆の思い出、特別寄稿、国立移管25周年記念誌、国立大村病院昭和46年。さらに「長崎原爆の記録」東京図書出版会、2007年8月もほぼ同じ内容です）とでもいうべき本です。大変読み応えのある記録ですので、機会がありましたらご一読してみてください。

余り世に知られていないこの病院こそ、戦争が生んだ大きな施設で、戦争中南方に於いて傷つき、或いは患いたる兵士を收容し、度重なる大村の空襲に際し、軍民の何れを問わずこれを治療し、長崎原爆の当日には758名の爆傷患者を收容し、更に他の病院に応急收容中の爆傷者で重症なるものは收容して合計千数百名の長崎原爆患者を治療した病院である。

原爆被災者を收容した時の光景を

担架にて收容された患者は顔面黒焦げとなり、一部表皮が剥離して赤い血の滲む皮下組織を露出し、頭皮は褐色に焼けた縮れ、着物はひとり残らず裂け散り、焦げて地色などは識別すべもなく男女の性別すら外観上では全く不可能な程の惨状を呈し、何を尋ねても応答なく呻吟する力もなく僅かに呼吸するのみである。（中略）

と述べています。

話が変わります。私事で恐縮ですが、戦前には大村海軍病院と呼ばれていた国立長崎中央病院（現、長崎医療センター）で精神科医長、そして副院長を務めました。その後、嬉野海軍病院と呼ばれていた国立嬉野病院（現、嬉野医療センター）では、院長を経験しました。こうして2個所の病院に勤めました。二つとも、まだまだ海軍病院時代に使われていた2階建ての木造病棟が残っていましたので、海軍病院の名残を身近に感じながら勤務

しました。

この二つの海軍病院には、原爆被災直後から多数の被爆者を載せた救援列車が長崎市の浦上駅を出発し、沿線の各駅で、被災者は降ろされました。海軍病院等とか地元の市町村が懸命な救援活動で行われたのです。大村海軍病院では、原爆投下の当日だけで758名でしたが、嬉野海軍病院では長崎原爆投下の翌日、原爆被災者が長崎県の彼杵駅から患者バス2台とトラック2台で何回も運ばれ、最初に100名、その翌日に80名も運ばれました。

その時の様子を、(嬉野海軍病院の事務職員)太田定一の証言：

職員総出で、この被爆者達を当時の第9病舎に運び込まれました。被爆者はほとんど毛布を被せられておりましたが、全身ただれて、ひどい焼けど、を負い、男女の区別もつかないようでした。あの時の光景は一生、私の脳裏から離れません。

とあります(廣田典祥：嬉野海軍病院、嬉野国立病院自家出版、病院長室所蔵)。

来年の2025年、終戦80周年を迎えます。被爆者が居なくなる時代が間もなくやってきています。原爆被災の実相を今ここで必死に記録として残しておかねばと思うのです。

被爆体験者の個々の声を「今こそ聞け」という努力がマスコミ等で繰り返されています。それも大事。さらに被爆者を多数収容し、救援してきた個々の医療施設等で繰り返されてきた現場の、医師や看護師等の被災者に対する救済側の声も「今こそ残して置く」ことも大事だと思います。

これから「大村海軍病院」にまつわる話をいくつかのシリーズとして、国病久原会ホームページに随時投稿いたします。当院の遙か昔の歴史になりますが、先人が残した伝統の中から何かを学びとっていただけたら、と願っております。

私は、一介の医師です。歴史家のように、多くの史料を読み込んで、歴史観を打ち立てるような仕事はできません。差し当たり「大村海軍病院」が、かつて存在していたということだけでも分かって頂ければ幸いです(続く)。